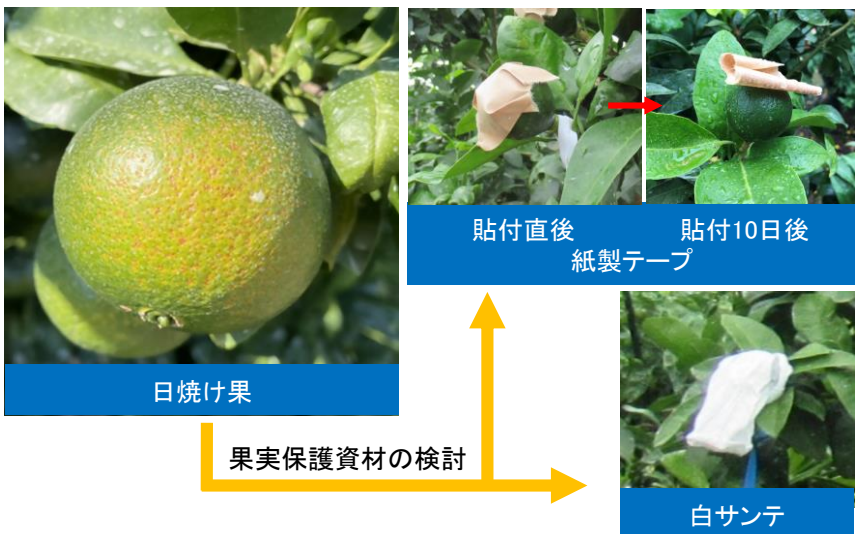


‘愛媛果試第48号’の栽培上の留意点

愛媛果試第48号は日焼け果が発生しやすいが、果実保護資材の活用により軽減することが可能。また、収穫時期が遅く寒害の危険性が高いため、果実の凍結が懸念される地域では露地栽培を避ける。

日焼け果の発生と果実保護資材の活用



果実保護資材の違いが日焼け果の発生に及ぼす影響

試験区	糖度	クエン酸 (g/100ml)	果皮色 a値	日焼け	
				発生率(%)	発生度
白サンテ区	12.9	1.18	17.2	6.7 b	6.7
紙製テープ区	13.2	1.20	17.6	20.0 a	8.1
対照区	13.4	1.21	17.5	20.0 a	10.4
有意差	n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.

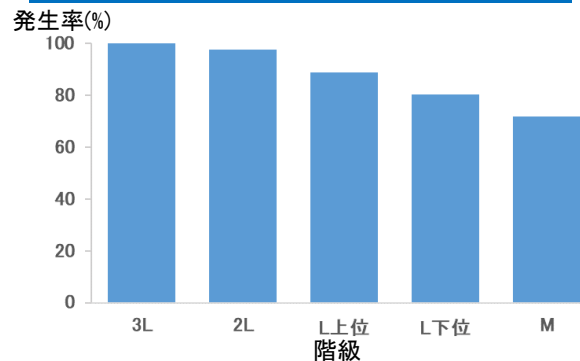
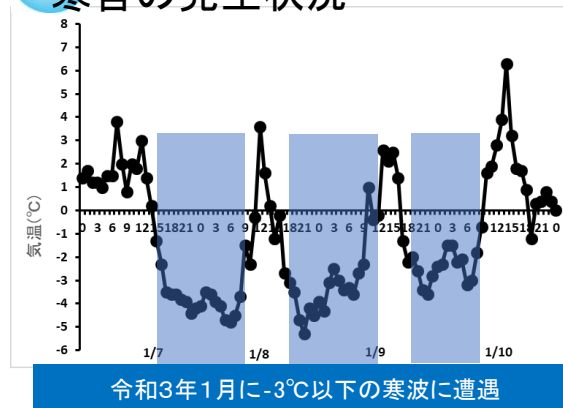
注)・南西方向の日当たりのよい果実を対象に調査

・7/19に果実保護資材処理 日焼けは10/9に調査 果実品質は3/22に調査

・発生度 = \sum (発生程度果数/指数) × 100/(調査果数 × 3)

- ・南西方向の日当たりの良い果実で2割程度発生
- ・白サンテの被覆により発生を軽減可能
- ・紙製テープは風雨により剥がれやすく効果がやや不安定
- ・降雨や強風の後には果実保護資材が外れていないか確認する

寒害の発生状況



階級ごとのす上がり果の発生率

注)

・伊台ほ場にて調査

1/7 17:00 - 1/8 8:00

1/8 17:00 - 1/9 8:00

1/9 20:00 - 23:00

に-3°C以下を観測

・寒波遭遇時、黒サンテを被覆

・階級はネーブル規格に準じ、L上位は7.7cm~8.0cm、L下位は7.3cm

~7.7cmとした。

- ・露地栽培の7割以上の果実で、す上がりが発生(苦みもあり)
- ・階級が大きい果実ほど発生率が高かった
- ・収穫期までに-3°C以下となる園地は、露地栽培を避けるか、ハウスで補助加温栽培(最低温度2°C設定)を行う